

世界名詩集(全26巻)22 サンドバーグ シカゴ詩集

バウンド ヒュウ・セルウィン・モーバリー

定価 六〇〇円

昭和四十三年四月十二日 初版発行

訳者 安藤一郎 岩崎良三

発行者 下中邦彦 東京都千代田区四番町四番地

発行所 株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四番地 振替東京29639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界名詩集 22

サンドバーグ

Sandburg

シカゴ詩集

CHICAGO POEMS

パウンド

Pound

ヒュウ・セルウィン・モーバリイ

HUGH SELWYN MAUBERLEY

平凡社

装
幀
原

弘

シカゴ詩集

わが妻　わが友の

リリアン・スタイケン・サンドバーグ
に捧ぐ

C・サンドバーグ

これらの作品の或るものは初めて詩誌「ボエトリ」(シカゴ)に載った。同誌の好意によって、ここに再録することを得た。著者は「ボエトリ」誌の編集者ハリエット・マンロウ及びアリス・コービン・ヘンダーソン、「リーデイズ・ミラー」誌の編集者ウィリアム・マリオン・リーディーに心から謝意を表する。この書に依然として変らぬ人間の言葉の価値があるとすれば、それはこれらの人々に負うところが多いからである。

安藤
一郎
訳

救済 92
 戦争 93
 道とその終り 94
 道とその終り 94
 選沢 96
 墓 97
 アズテック族の面 98
 嘲りの神 100
 答え 102
 或る死者に 104
 下にあるもの 105
 スフィンクス 107
 おれはだれか? 108
 われらの感謝の祈り 109
 霧と火 109
 窓のそばで 111
 秋の満月の下 113
 すばらしい狩り 114
 単調音 116
 喜び 117
 ワイシヤツ 118
 アズテック 120
 二つのもの 121
 裏庭 121
 防波堤で 122

マスク 123
 真珠いろの霧 124
 ぼくは歌った 125
 愚行 125
 六月 127
 荒れ果てた煉瓦工場のノクターン 128
 あじさい 128
 黄の主題 128
 二つの山のあいだに 130
 最後の答え 131
 窓 132
 若い海 132
 骨 134
 仲間 135
 幼な児 136
 罌粟 137
 子供の月 138
 マーガレット 139
 影 140
 夜ふけの電車でつくった詩 142
 大したこと 143
 肉をひさぐもの 144
 ハリソン街の路地 145
 汚れた鳩 145
 酒場ユングハイマーで 146
 去った女 146

かつての日々 148
 たそがれの夢 149
 埠頭 151
 一日じゅう 152
 待ちかまえる 153
 岸辺から 155
 五月の高原 155
 夢の少女 157
 犁をひく若者 158
 ブロードウェイ 159
 老婆 160
 正午 161
 浮浪者 162
 電信柱の下で 163
 おれは民衆だ、暴徒だ 163
 政府 164
 言語 165
 死んだイマジストたちへの手紙 167
 羊 168
 赤い息子 169
 霧 171
 屑屋 173
 銀の釘 174
 ジブシ 175

シカゴ詩篇

シカゴ

世界のための豚屠殺者、

機具製作者、小麦の積上げ手、

鉄道の賭博師、全国の貨物取り扱い人、

がみがみ唼^{どな}鳴る、ガラガラ声の、喧嘩早い

でっかい肩の都市。

おまえは不埒^{ふちち}だとみんなが言う、おれもそうだと思う、おまえの白粉^{せしご}を塗りたくった女たちがガス灯の下で農村の若者をひっぱっているのを見たからだ。

それからおまえはやくさだとみんなが言う、おれは、うん、その通りだと答える、やたらにピストルをぶつ放す凶漢が人を殺し、また自由になると人を殺しに出かけるのをこの眼で見たからだ。

それからおまえは残酷だとみんなが言う、おれの答えはこうだ——女や子供の顔に無慈悲な飢えのしるしをおれは見た、と。

そしてこう答えてから、このおれの都市を嘲笑する者どもにむき直り、その嘲笑を投げかえして、おれは言うんだ。

ほかにこのように昂然と頭をあげ、活々として粗っぽく強靱で狡猾なことを誇り顔に歌っている都市があったら、さあ見せてくれ、と。

仕事に仕事を重ねるあくせくとした労苦の中で磁力を持った罵言を飛ばしながら、ここに小っぽけな弱虫の町々を圧倒して、のっぽの、不敵な強力漢が立っているのだ。

舌なめずりしてまさに飛びかかろうとしている犬のように獐狂で、荒野にむかって闘いを挑む野蛮人のように抜け目なく、

頭はむきだし、

シャベルをふるい、

粉碎し、

計画し、

築き上げ、ぶちこわし、また築き、

煤煙をかぶり、口じゅう埃だらけ、白い歯をむき出して高々と笑い、

恐ろしい運命の重荷を背負い、青年が笑うように笑い、

敗けたことを知らぬ無知の闘士のようにも笑い、

その手首の裏には民衆の脈搏、その肋骨の下には民衆の心臓があることを大いに自慢して笑っている、

笑っている！

半ば裸で、汗を流して、豚屠殺者、機具製作者、小麦の積上げ手、鉄道の賭博師、全国の貨物取り扱い人であることを誇る「若者」の、がみがみ呶鳴る、ガラガラ声の、喧嘩早い笑い声を高々とひびかせて。

スケッチ

いくつもの船の影

波がしらに揺れる

ゆっくりとした、おだやかに巻きかえす潮の

沈んだ青い光沢の中。

空の傾斜に長い褐色の横棒が

海のひろがりに砂の長い腕をさし入れる。

澄明でやむことのないひだは

寄せては、もどり流れ、退いていく。

さざなみが碎け、消えかかる白い泡沫は

渚の床を洗う。

沈んだ青い光沢の中

波がしらに揺れている

いくつもの船の影。

大衆

山々の間をさまよい、おれは青い靄と赤い岩を見て、ひどく驚いた。

かぎりない湖の下^{もと}の長い攻撃が行なわれる海辺に、おれは黙然としてたたずんだ。

大草原の星の下で北斗七星が地平線の草の上に傾くのを見つめながら、おれの胸はいろいろな想いでいっぱいになった。

おえら方、戦争と労働のページェント、兵士や労働者、子供を抱きあげる母親たち——これらすべてのものにおれは触れて、その厳かなおののきを感じた。

そしてある日のこと、おれはしかと見たのだ、貧しい者を、辛棒強く骨折りつづけている幾百万の貧しい者を、岩よりも、潮よりも、星々よりも辛棒強く、夜の暗黒のように辛棒強い、無数の――打ちひしゃがれながら、堪え忍んでいる諸国のみじめな人々のすべてを。

迷える

寂しく、またうら悲しく

夜っびて湖の上

濃霧がたれこめ、靄がたなびくところに
船の汽笛が

ひっきりなしに呼び叫ぶ、

おろおろと泣く

迷える子供のよう

波止場の胸

波止場の眼をしきりに探めて。

波止場

ごちゃごちゃした汚ない塀を通り
戸口には女たちが

飢えの手の影につきまとわれる、

飢えに落ちくぼんだ眼をむけている

ごちゃごちゃした汚ない塀を過ぎると、

突然、市のはずれに出て、

青い湖のひろがりにぶつかった、

太陽の下、湖の長い波々は

岸辺の沫^{よもぎ}をちらす曲線に砕けていた。

そして羽ばたく鷗の嵐、

大きな灰いろの翼と

空飛ぶ白い腹のおびただしい群団が

大気の中をのびのびと旋回して舞っていた。

彼らは言うだろう

ぼくの市で一番悪いところについて、人々はきつこう言うだろう、

おまえは小さい子供たちを太陽と露から遠ざけ、

でっかい空の下の草原にたわむれる明るい陽ざしや、

痛快などしや降りから遠ざけてしまったことだ、子供たちを壁と壁の間に閉じこめて、

パンと賃金のために、打ちのめされ、窒息させられながらも働き、

二、三回の土曜日の晩にわずかな給料をもらうために

喉に埃を呑みこんで、心臓もからっぽのまま死ぬようにさせたことだ、と。

工場のドア

おまえは二度と帰ってこないね。

おまえがドアに入っていくのを見送って、おれはさよならと言うよ。

おまえを呼び待ちかまえている、望みのない開いたドア、
そこからおまえを連れこむドア——一日何セントなんだい？
ねむたい眼と指にたいして、いったい何セントになるんだい？

おれはさよならを言うよ、あれらがおまえの手首に穴をあけるのを知っているから、
毎日毎日、暗闇の中、沈黙の中、
それでおまえの体じゅうの血は一滴ずつ流れ出る、
それでおまえは若者になる前にもう老いてしまふんだ。

おまえは二度と帰ってこないね。

ホールステッドの市街電車

来たまえ、漫画家の諸君、

朝の七時、

ホールステッドの市街電車にのって、
ぼくといっしょに吊革きがに下りたまえ。

鉛筆をとって

こういう連中の顔を描きたまえ。

きみたちの鉛筆でこういう歪んだ顔を描いてみたまえ、

あの片隅にいる野豚狩りを商売にしている男——その口——

あの仕事服工場の娘——そのたるんだ頬。

鉛筆をもって

疲れたうつろな顔たちの

記憶をとどめる方法を見つけたまえ。

夜の眠りのあとの、

湿ったあかつき

ひんやりした明け方、

望みに倦み、

夢もない

顔たちを。